香港という港で

中嶋嶺雄

圧倒的な想い出

仕事柄いまでも年に数回以上は海外へ行く。その私が最も多く訪れた外地は、実際に数えたわけではないけれど、おそらく香港ではなかろうか。香港には若いころ外務省特別研究員として二年近く留学したこともあり、香港に関する私の著書や訳書も数冊あるのだが、そのように身近な香港との最初の出会いの一齣は、私にとってまったく予期しないものであった。それだけに、強烈な想い出として、心のひだに深く染みついている。私にとっての一つの「秘話」だとも言えよう。

それは、もう半世紀近く以前の一九六六年十一月八日のことであった。この年八月、中国で文化大革命が開幕、北京の天安門広場には紅衛兵の大群が出現し、手に手に赤い『毛沢東語録』をかざしつつ「毛主席万歳！」を叫んで世界を驚かせた。当時は中国を訪れることが一般には容易ではなかったが、私はたまたま同年十一月十二日に北京の人民大会堂で開かれることになっていた孫文生誕百周年記念式典に参加できることになったので、ぜひ中国へ行ってみたいと思っていた。その年の四月、私は東大の大学院を中退して東京外国語大学の助手になったばかりであったが、国立大学なので国家公務員であり、公務員の共産圏渡航禁止令にひっかかって、日本政府（文部省）からの海外出張許可が下りなかった。日本代表団はすでに出発していたが、なんとかならないものかと人事院総裁に直訴し、ようやく許可が下りて私一人だけ遅れて香港経由中国へ行くことになったのである。私

にとっては初めての海外への旅行であった。

なにしろ当時は中国情勢が連日マスメディアを賑わしており、中国を研究する私にとっては専ら中国大陸の出来事に関心があったので、香港については単なる通過地として認識していたに過ぎず、まったくの関心外であった。午後に香港の当時の啓徳（カイタック）空港に到着し、中国訪問者が泊まる九竜（カオルン）側市内の金門酒樓（ゴールデンゲイト・ホテル）に一泊して、翌日九竜駅から鉄道で深圳経由広州に向かうことになっていた。当時の九竜駅は、尖沙咀（チムシャーツェイ）という波止場の近くにあったのだが、翌朝の駅の確認も兼ねて波止場まで行ってみようと思い、九竜市街地の大通り（彌敦道（ネイトンタオ）〈Nathan Road〉）に沿って地図を頼りに海の方へ下っていった。しかし雨模様だったので香港島もはっきり見えず、ホテルへ戻ろうと思ったその瞬間、霧と靄が突然に晴れて香港摩天楼のビルの景色と対岸右手に聳えるヴィクトリア・ピークがまるで指呼の間に姿を現したのであった。それはまさに圧倒的な迫力をもつ光景であった。何の予備知識もなく、無縁な存在だと思っていた香港の港のエキゾチックでわくわくするような情緒にすっかりとらわれ、中国からの帰途にも、中国情勢の研究・分析も兼ねて約四〇日間も香港に滞在することとなったのである。

なぜ「香港」か

ところで、香港は、なぜ「香港」と呼ばれるのか。

昔この島に、香姑という名の女海賊がいたとか、付近を航海する船が島の南側にあった滝の香りのよい水を飲料水にしたため、という説は誤りで、広東省東莞（トンガン）県付近で産する香料を積み出した港が香港と呼ばれ、やがて島全体の名称になった、という説が有力のようである。

ここにいう東莞県は、歴史上は林則徐がアヘン戦争のときアヘンを焼きすてたことでも有名な香港に近い虎門を有し、中国近代史にもしばしば登場する地であって、最近は改革・開放政策のモデル地域として知られている。そこで産出した香料は〈莞香〉と称され、〈莞香〉は最高品質の香料として珍重されたという。その〈莞香〉を積み出した港が現在の香港島に存在したのであろう。

もっとも、香港という名称の起源に関しては、従来から諸説があった。右の香姑起源など以外にも、孫文を生んだ広東省香山県（現在の中山県）に因むという説や

紅港（Red Harbour）より生じたという説、水上レストランで知られる香港島裏側のアバディーン（Aberdeen）の現地名・香港仔に起因するという説、現在の銅鑼灣（Causeway Bay）東南の香爐山に由来するという説、九竜半島先端尖沙咀の古名・香捫頭に依る説等々である。

これらの説は、現在のアバディーンの近くに島内第一の瀑布があり、その清流が現在の瀑布灣（Waterfall Bay）に流れ込んでいて、外国船は、ここの水を飲料水として補給するために現地に立ち寄り、そこから香港の名前が伝えられたとする説（その渓流が「香江」であり、河口が「香港」であったという）ともあまり矛盾しない。

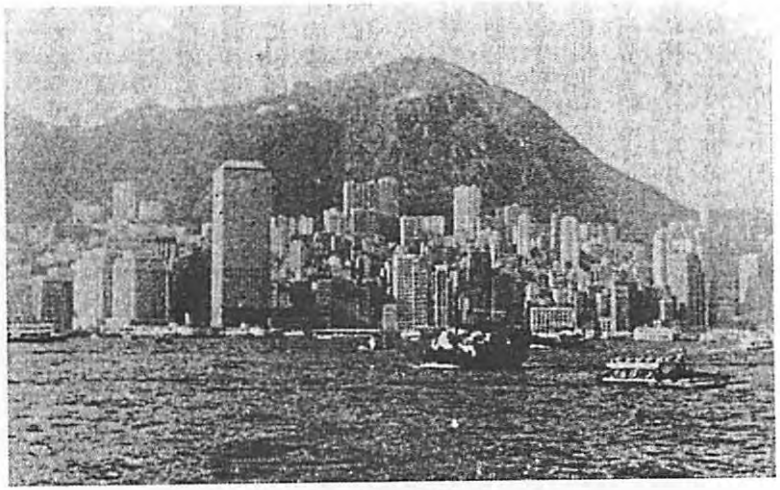
なぜなら、標準中国語（北京語）ではウェード式表音でHsiang Kang（拼音ではXiang Gang）と呼ばれる香港は、広東語ではHeung Kong、客家語ではHiong Kongであって、当時、現地に存在した客家、福佬（鶴佬、學佬とも書く）そして蜑（蛋）家（水上生活者の蛋民）などの原住民が用いた発音がそのまま外国人に伝わって今日の「香港 Hong Kong」になったと考えられるからである。

いずれにせよ、〝海賊の島（Ladrones）〟としてごく一部の航海者に知られていたに過ぎない美しい緑の島、絶好の錨地たる香港島の沖合に最初に到来したイギリス船は、一六八九年に碇泊したイギリス東インド会社のDefence号であった。下って一八〇六年～一九年に中国沿岸の測量を実施したイギリス東インド会社の水測師ホースバーグ（Captain James Horseburgh）はおそらく最初の上陸者だと見做されている。

ついで、大英帝国の全権大使として知られたアマースト卿が清国へ向う途中、一八一六年七月に島の南岸に乗艦Alcesteを寄港させ、この地で給水したのであった。

一行のなかの随員エリス（Sir Henry Ellis）は「給水の場所は、絵のような風景であった」と書いており、軍医ムレオッド（John M'leod）は「美しい青色の岩を越えて海中に注ぐ瀑布に目を惹かれる」と述べて、その瀑布を描いた水彩画を残している。香港の歴史についての古典的名著G・R・セイヤーの『香港』(G.R. Sayer, Hong Kong: birth, adolescence, and coming of age (London: Oxford University Press, 1937)）には、その水彩画が掲載されている。

G.R.セイヤー著『香港』(Oxford University Press, 1937）に掲載の水彩画にある滝



ヴィクトリア・ピークと香港摩天楼　写真・筆者

港としての香港

明治の小説家、大橋乙羽は、香港の風景を描写した名文で、こう書いている。

「はや香港は近うなりたり、人の住める島影を認め得たり……香港海峡を入るに、狭きところはその幅隅田川位もあらんか、両岸山峙ちて雲頂上を徘徊す。港口に數多の砲臺ありて、その壁上を歩哨の來往する狀も、手にとる如く見ゆ。右に九龍島を望み、左に香港を望んで、両々呼べば應えんとする有様は、恰も門司と馬關の如く、船上より望めば、風光双眸に落ち來るなど、奇絶怪絶なり。（中略）香港はわが函館の如く、峨々たる青山によりて、建てつらねたる市街なれば、電燈の光戸々の窓より洩れて、波にその影を落とすも妙に、折から船の用意よしといふに、直ぐ飛び乗りて岸に上るに、本船より一里ばかりもあらんか、七八分にして陸に達しぬ」

――大橋乙羽『歐山米水』（博文館、一九〇〇年）

右に紹介した大橋乙羽が香港を訪れたのが一九〇〇年（明治三三年）、さらに下って、歌人・与謝野鉄幹は一九一一年（明治四四年）に訪欧の途次香港を訪れ、「夜に入つて船の上から觀る香港の燈火は、全山を水晶宮とし其れに五彩の珠玉を綴つたとも謂ふべき壯觀であつた」と感嘆し、愛妻・与謝野晶子に宛てて香港の電信局から電報を打っている。

このように、香港の港のあの独特の風光を本当に味わうためには、船でこの港に到着しなければならない。もう三〇年以上前になるが、私はそのために横浜から船で香港へ行ったことがある。明治維新期に開国派の重鎮・伊藤博文らが有名な商社ジャーディン＝マセソン商会の援助で香港経由渡英した頃には横浜から香港までほぼ二週間を要したのに、今日では、一万トン級の客船で四泊ほどすると香港海峡に着き、明け方、「狭きところはその幅隅田川位もあらんか」という鯉魚門海峡を通って、香港が世界に誇るオーシャン・ターミナル（海運大厦）の埠頭に横づけになる。

このあたりの埠頭、つまり九竜側と香港島を結ぶ連絡船スターフェリーの船着き場脇からの香港の港の風景も、観光的にはヴィクトリア・ピークから眺める香港全景と

ともに、まさに絶景だと言わねばならない。

〝東洋の屑籠〟のさざめき

花崗岩の巨塊が露出した急勾配の山腹に押しあいへしあい重なりあってへばりついている無数の難民バラック、それと隣り合わせで林立する高級な高層アパート群、そのビルの向こうに見える銅鑼灣の防波堤にゴミのようにたまっている夥しい数の舢舨。大型の貨物船や軍艦が碇泊するヴィクトリア港にはフェリーがあちこちに行き交い、ときには帆を広げた戎克やヨットもすれ違う。その海峡を隔てては九竜の工場街が散在し、新界の山並みも遠望される。

私がかつて一九六九～七一年に約二年間に亘って毎日眺めてきた香港・大坑道の谷間の光景である。

すべてが不調和に混在したこのスクリーンも、やがて夕暮れ時を過ぎると、華麗な夜景に変じて輝き始めるのだ。広東語の世界のあの活気に充ちた人間集団の息吹や体臭をすっかり浄化してしまったかのように、〝東洋の屑籠〟が美しくさざめき、まさに〝東洋の真珠〟となる。

私が好きなモーツァルトだのプロコフィエフだの、もちろんバッハやヴィヴァルディは言うに及ばず、当時、東京にはなかったフィリップスやグラモフォンのカセットテープを、香港なら安く買えたので書架に一杯並べていた私なのに、なぜか香港の夜景には、Strangers in the nightなどの詰まったレイ・コリントンのテープがぴったりで、聴き飽きることがなかった。中国大陸がまだ文化大革命の渦中にあった頃のことである。

それなのに、このカセットも東京の自宅では、もうほとんど聴くことがない。

この四〇年近い歳月のうちに、香港もすっかり変わってしまった。私が眺めていた大坑道からの光景も大きく変わり、マンションの高層ビルのみが視界をさえぎっている。中国に返還されて特別行政区となった一九九七年七月以降、古き良き時代の香港は、私個人にとっても一つの歴史になってしまった。

（なかじまみねお・国際教養大学理事長／学長）